



大伴金道忠孝圖會

後編

三

13
2692
8



皇

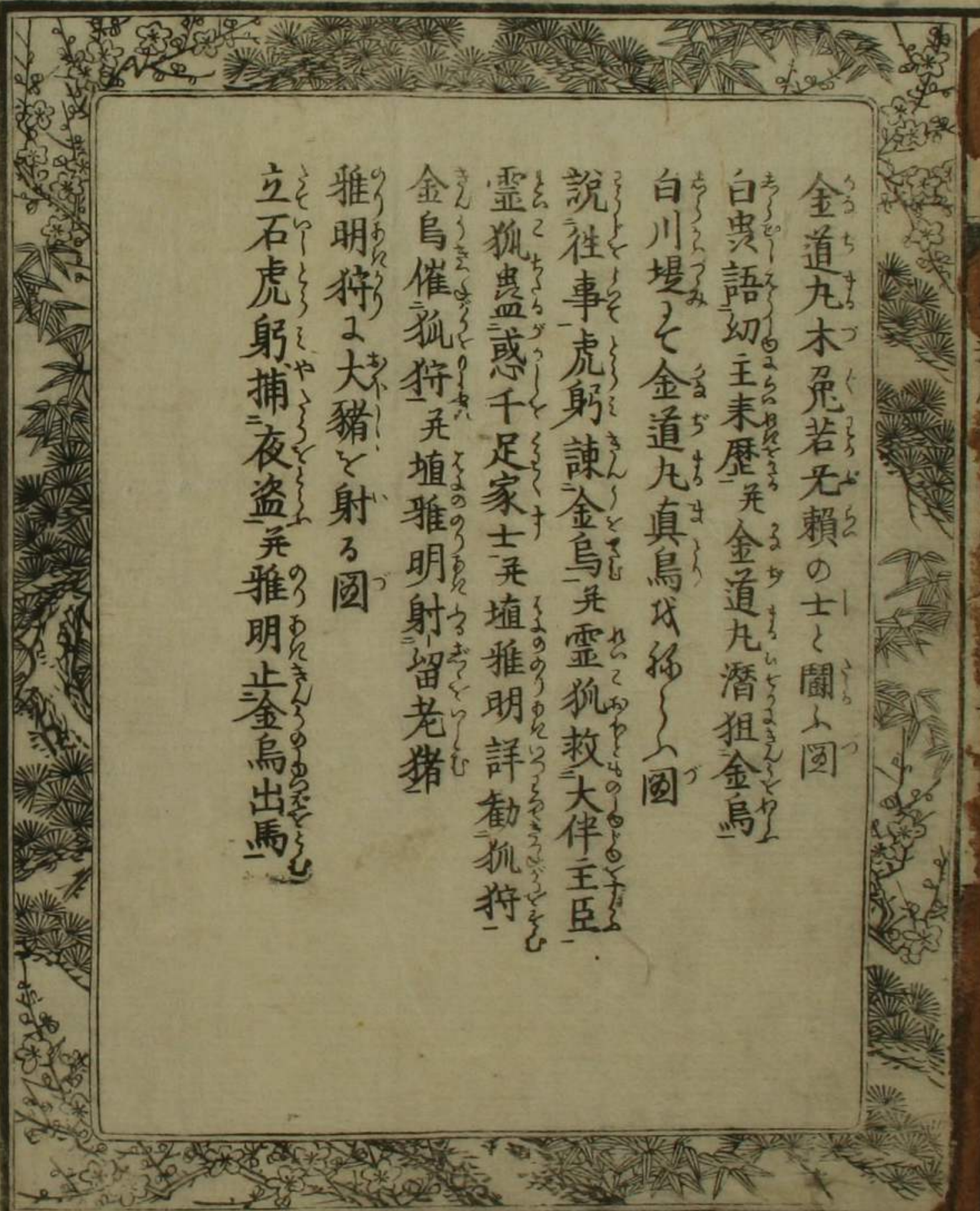
大伴金道忠孝圖會後編卷之三

目錄

- 金道丸智投盜賊并丹生楮根事等
- 龜山太臯再會雅明并雅明義返太刀
- 金道丸土庫の内ある賊を捕ふ圖
- 龜山父子闘賊徒并芦城山塞邂逅舊友
- 龜山父子山賊とたふす圖
- 龜山訪白叟草屋并兩雄謀復讐
- 助野狹兩童大懲醉狂衆士

大伴金道忠孝圖會後編卷之三

2692
8



金道丸木免若元頼の士と闘ふ圖
 白夷語幼主未歴并金道丸潛狙金鳥
 白川堤と金道丸真鳥成ゆゝ圖
 説社事虎躬諫金鳥并靈狐救大伴主臣
 靈狐患或千足家士并埴雅明詳勸狐狩
 金鳥催狐狩并埴雅明射留老猪
 雅明狩并大猪と射る圖
 立石虎躬捕夜盜并雅明止金鳥出馬

金道丸

大伴金道忠孝圖會後編卷之三

浪華 好花堂野亭著編

金道丸智捉盜賊并丹生櫛根事等

光陰の停ぎる変強と放と一奔空前比く低小下る流水の如く早良等
 養食二月する馬未田が遺子及名満君己小十二歳小及々等八心中小稚君
 十五歳小成りく大事と結明一却又の仇復せ進とるれ計義と廻さんと
 思ひ寛平白狐の祠り心更なり神社佛図参詣とる度小金道丸が武運
 長久と祈り王々る小孫早良が住所より半里許隔て所小壹岐の社とり宮
 居あり々々祭る神ハ古の武内宿祢の臣下小壹岐直真根子とい人の靈と
 鎮祭まり其来由と尋る小往昔應神天皇の御宇武内宿祢筑前國乃守
 獲職小任ざれり則ち任國下り住居有る小其舎弟甘美内宿祢舎兄と

恨める事有て天皇へ我兄武内宿祢密小玉位を篡へと謀叛と企む跡形
かれ逸言敷度不及れを天皇終小倭舌の為小言惑されぬ武内が謀叛を
たりと思食官軍と差下して武内を征伐せしめぬ官兵武内館舎を取
囲む攻る事急なり武内ハ毛頭覺かれ無実の虚名を以て事火急して陳謝
を命ぜられ違ひ己小自殺せんせし其臣壹岐直真根子大少練留め暗水
主の武内を後門より落し其身よく武内と面体拾好似と幸小自身武
内が甲冑と著し武内宿祢虚名の為小自殺せしむと呼り腹搔切て死
らるるれを官軍真の武内たりと思ひ其首と取取て都へ凱陣し其後小
武内宿祢都へ上り叛逆の企せざる旨と敷奏し之れを甘美内宿祢種
言妨げ理非分明をされぬ此六神明の照覧を以て邪正を定むるを
磯城川の上小神祇を祭り其前小脚鼎と居て熱湯を湛武内宿祢と

甘美内宿祢小右の熱湯と手と以て探らせぬ是吾朝小湯起結の起源
時小兄弟も熱湯の中へ手とさへ探さる武内の手少も爛れ甘美が手
ハ大小爛れ悩む事ふより甘美内宿祢と非と強く責問せぬ小遂小自状
小及び逸奏の罪極り刑せられ武内宿祢ハ虚名暗く旧の職小任せられ
是小依て武内、壹岐直が忠死を賞して二社の神小鎮祭るぬ壹岐の神社
是かり生の松原といふ実、壹岐の松原あり後生の字小書換る抑武内宿
祢と大伴家の真祖といひ壹岐直真臣の節と守り忠義の為小命を抛
し人等が身上小相似る事なれ此社の神靈を我忠義と照覧しぬらる
當國小脚小甲始より祈願を乞て歩と運ひ仰願ふ其小忠と哀
愍かりぬ金道九殿無事成長有る仇敵金鳥と亡し家名再真有
中、護せぬと渴仰し暇ある時必と糸緒丹誠を凝して祈りたり

去り程遠くねむ夜小入ても社衆一々るが一日哺時より壹岐の社へ詣々ふ
其路小知己小逢強誘まて其人の家小行酒食の管侍小預り不斗
時次と接し々る等が宿小妻女良人の飯りの遅れを待りて小房小入
枕小着々れも満石父の飯り小待んと机ふりると手習して居る々々小忽ち外
の方小減離くと怪しれ物音中々るが戸の透間より覗見れむ一人の大男堀
次兼踏々潜入庭前の庫の前に行き如何しての鎖をこが用て這入るる普通
乃童子かろせむ噫乎と怖叫登れれも天姓大膽不敵の満石此も心ろ
更なく賊の庫へ這入り小熟と見まらる音せがやう和ら戸を裸用潜歩て
庫の前寄ひると右側とく鑿とくけて甲の座かろる何氣かれ体ゆる手習
し々る然る折々等飯りあうて戸を叩々るれも満石まろ戸を閉今飯り
ぬひやとり小等答て今宵不斗何某が家誘れ弛ま小逢々遅刺

あうり你ハ未だ寤寐をよとひまろ不否御飯りあると待んら手習して居れど
と言ど等不思落涙し心中ハ是ハ勿躰たれ更々々重代の主君と深更
小及まぐ待せまら安岡と酒食小耽居一罪深さよ金鳥が方へ漏れまらん
更と憚りて後小我子と呼たをまて恐君れ小真の父と思ひし我飯り待夜
乃更をも厭ひぬぬ痛々さよ亡君せ小存命ゆひて此御孝心を見らるるこそ
嬉しく思ひのふらめと思ふ付て金鳥が奸悪と悪く憤り粉骨碎身して
此推君小仇と復させ進ませ止せぬれれ無量の更と胸裡小思ひ續わか
面ハ左あゝれ体ふて你久く待り眠るるどあゝ早く寢るるれも否又先ね
り又我と書くるる物へ小書終て夜帳ひ布るとよまて等愈感しるる我先
眠るるると小房へ入るる満石ハ先刺より庫の内なる盜賊と搦捕をれ手習を
工夫して有るるが己小方便と案下出用心の緒繩を取らるる未と我帯小腕と

拵り付端を引結締めて緒繩を手繰持徐小庫の前へ到り音とるや小
鑿をまづ其身の庫のさへ屋根へ閃と飛上り賊の出るを窺ひ居たり盜賊
庫へ至り驚れ心慌て戸を開くと種々何れも叶ふを憫果て居たり今鑿
のさへ音とて試み戸を引開く小快く開き心慌ひ面と出て西邊を
窺ひ見るふ下弦の月坐小影さへ人無休たるふを便よと賊を抱く立
出る満石能又とるし屍より身短く賊の肩へ飛下りて又持する締を手
早く賊の首小掛背より首小抱付たる盜賊大不狭ながら小重たれ物も
せど左手と以て満石が帯と引扱二回許投かりたる小投ると比く己が首小
掛し締去りたるを再び強た行手やと搜取んとする内小満石両手を
くけく緒繩を強く曳くふと賊の首と締れ息止る許をね抱し物を捨
置と解んと何々を満石猶と身と鎖小と曳締る程おさうとの大漢也

呼吸を止られて僅十二才の満石小曳介されたり其時満石高声小次盜賊を生捕
りや合のいと呼る声小等夫妻狭く起立肥松より寄火と点し夫婦とも
庭前へけ出斯とるより等手早く緒繩やと賊を高手小縛り諸満石
小向ひても何如何と此賊を捕しやと向満石前より條を逐し小絡々やと
夫婦とも其頓智膽略とて感賞したる時小等賊の休とるふ身杖五尺
七八寸やと筋骨逞しげある曲者たりを即ち賊に向ひ你が面魂小盜とし
者なりやと必定日類有る明白小白状せよ時宜小依て放ち飯らむと向
たり小賊面を上る我小日類ハハと素より年古れ盜賊もいふと何まう包心
た原ハは蘇我赤兄公小仕し丹生櫛根と呼ぶ者おらる至君赤兄公大友官事
小逆謀と勘科小より去ぬる壬辰の兵乱の後刑戮小行れ我徒ハ追放せられ
恒産かれ小賊とかりぬいた我諸國の家へ竊入りぬもの今夜のさう幸に目

尺一更とこか。僅わずか十三とせ才さい成なりるを覺おぼれ少せう入いりの謀まう中ちゆう陥おちる。斯この面めん縛ばくせられ八はつ運うんの
尽つる。いふ久く。今いま速すみ小こ首くびを刻きる。怖おそれを脚あし子こ息いきの智ち才さい短たん捷せつ世よ再また有あるは
奇き童どうおて在あり。成なり長ながく。通とおの人ひと傑たつと成なりる。只ただ官くわん答たふ賞しょうし。々々も
等らも渠このが約やくの潔けつれをきく。惻あはれれの心こころ生なり。助たすむと思おもひ。你あなたあさ。丈夫ちゆうぶの身みあ
碌ろくく。草くさ賊ぞくとあふ。先まづ非ひを改あらて。我われ兒こ小こ動どう仕しとる所ところ存ぞん在ざいる。や。我われ兒こ
順したがふ。命いのちと助たす得えるを。言ことを。賊ぞく大おほく。悦よろこび。凡たゞ生なる。生なる者もの何なに者ものが。一ひと命いのち惜おし
い。い。若わか我われ一ひと命いのちと助たす賜たまふを。わ。脚あし子こ息いきの奴やつ僕はやくとなり。犬いぬ馬うまの旁そばと
活い命いのちの大おほ思おもと報はらひ。さ。答こたへ。ふ。助たす得えるを。と。繩なはと解とく。救すく
一ひと食く事ことを。と。せ。れ。儲たくわ根ね深ふかく。思おもを。謝あやま。是こゝより。早はや良よしが。下した僕はやくと。なり。新あら水みづ
乃すなはち。勞らうと厭いとむ。勤こま仕し。々々も。等ら大おほ婦めも。い。れ。家いえ子こと得える。と。と。悦よろこび。々々
龜山かめやま太た梟せう再また會あ雅みやび明あきら。兵へい雅みやび明あきら義ぎ返かへ太た刀や。

龜山太梟再會雅明兵雅明義返太刀

却さ統と宇う津つ田でん守しゅ。山やま太た息いき。壬にん辰しんの乱らん。親おや手てと皇みかど子この。大おほ伴ばん吹ふ負お小こ從じゆひ。數かず度ど勲いさ功こうと
頭あたま一ひと々々れ。吹ふ負お其その功こうを賞しょう。若わか年ねんの食く禄ろくと。と。公こうれ。も。田でん守しゅ敢あく。是こゝを受う
と。辞こと退たい。一ひと日にち吹ふ負おが。面おもて前まへ。出で申まを。々々も。其その身みの。所ところ縁ゆかりを。依よる。君きみと。頼たのむ。り
愚おろ見みと。も。脚あし扶たす助たすふ。預あづかり。莫な大おほの。脚あし高たか思おもと。擔かかひ。せ。あ。て。一ひと命いのちと。抛なげ。日ひ
頃ころの。恩おん惠けいを。報はらひ。と。ま。ん。戦せん場ばの。隨したがひ。り。所ところ運うん小こ叶は。存ぞん命めい仕しひ
偏ひとへ小こ君きみの。賜たまふ。臣おんが。幸さい何なに事ことも。身み不ふ起たり。ぬ。今いま世よ六む泰たい平へい小こ飯いりて
君きみの。脚あし家いえも。脚あし閑ひら暇まなり。け。々々も。等ら奇きの。不ふ愚おろ見み木き兔う若わかも。當あた年ねん十二じふ才さい
かり。ゆ。を。考かんがふ。先まづ年ねん橋はしの。白しろ虫むしが。懐なつかし。と。退たいひ。先まづ全ぜんの。雅みやび君きみも。十二じふ
才さい小こ成なりる。一ひと別べつ以い後ご何なに回かい小こ生なる。も。其その便べんと。不ふ聞きく。の。雅みやび君きみ白しろ虫むし
が。行ゆ衛ゑいと。尋たづね。ま。り。い。間ま何なに卒そつ臣しん小こ脚あし閑ひら暇ま賜たまり。と。願ねがひ。吹ふ負お小こ頭あたま首くび
申まを。と。理ことり。たり。我われも。一ひと人ひとの。姪やへの。所ところ在ある。尋たづね。と。思おもひ。と。公こう私しの。要よう敷しきが。敏み繁はんと。多おほく

龜山太梟再會雅明兵雅明義返太刀



意不任せむ。何と九列二島の内小潛居るを。你其所在と尋ふ行か。尋逢
む其旨文通せよ。粗西國の風貌と申す。金鳥倍虎威を逞まじ。九列小技屠
せりしを。茲を渠小心に寄る輩も。多うを構へ油断なく。復仇の義と
急心奮て。以金道九が十五六才なり。迫り隠密小せと忍び心長く。時の到を待て
と白虫小傳し。金鳥奸智深れ。金道九が世に在更と洩聞む。殊裁を練
る多れ。所在と人不知とさる。ちの心得第一と聲と。微細教示。路費の料を
沙金若干とさる。小田守頂戴と厚く恩と謝し。別を告ぐ。私房小飯り。木免
若とも。穢在を綱へ。石上を奈足先年吉野。使者小幸小。倣ひ木免若を
田舎小女小。紛装せ。其身も太刀と。菓苞小。隠して背小。肩首皮空深く被る。
諸國の神社と。順拜と。者と言ふ。五畿内と。過中國筋。或西國と。下り多。此
小吉備國。鞆の邊。小前路より。大勢の從者小。前後と。圍せ。馬上由り。武士

堂と馬歩。歩きたる。小田守。父子。路の傍。小除く。何國の國司。おやと。分て。被
か。振仰たる。時。馬上の武士も。田守と。直下と。同時。互小面を見。合々。小
豈量。人。是。別人。命。以。垣。雅。明。なり。を。田守。已。小。約。を。け。ん。を。考。る。小。雅。明。早
く。恥。と。同。結。一。從。者。小。向。ひ。く。彼。兩。人。小。身。小。結。を。分。れ。更。あり。搦。捕。て。旅。宿。曳。いと
令。と。ろ。ふ。ぞ。從。者。も。承。り。ひ。く。と。三。人。と。り。て。田。守。と。子。と。縛。搦。ん。と。木。免。若
大。小。強。れ。又。を。圍。く。料。た。れ。由。と。陳。謝。せん。と。多。小。田。守。我。子。之。制。故。意。鈍。と。傳
を受。たる。斯。く。雅。明。ハ。馬。步。せ。哺。時。小。旅。亭。小。着。一。入。の。繩。付。と。真。庭。曳。せ。夕
餉。の。支。度。も。と。從。者。も。と。皆。歇。せ。夜。更。人。定。て。後。自。身。與。庭。到。り。田。守。と。子。と
繩。と。解。る。座。敷。續。餉。を。勸。め。か。く。声。を。低。て。珞。り。小。龜。山。殿。疾。り。別。後。乃
妻。情。をも。演。る。れ。あ。れ。も。從。者。も。の。多。疑。ん。を。悼。り。故。意。傳。て。多。く。無。礼。と。世
多。罪。ハ。忍。し。の。久。先。壯。健。の。体。と。悦。り。た。れ。百。連。の。女。子。ハ。足。下。の。息。女。小。い。や。旅。行。の

体は何國(赴れ)自らあやと向れ(田守)各(て)足下も無(支)の体(て)満足(せ)る(借)何(より)結(る)る(筋)先(年)足(下)小(別)り(石)上(か)吹(負)公(小)身(を)寄(り)如(斯)く(乃)次(弟)なり(と)白(狐)の通(力)中(く)木(免)若(を得)し(支)と始(り)壬(辰)の乱(小)吹(負)が手(小)属(して)戦(場)小(赴)り(條)今(度)吹(負)と(辞)と(金)道(九)の所(在)を(尋)ん(る)西(國)へ(下)る(事)中(く)一(五)十(七)結(る)る(筋)雅(明)も(先)年(官)印(と)太(刀)と(證)迹(と)て(金)烏(を)鏡(と)し(武)士(小)執(を)られ(追)り(出)頭(し)今(度)都(へ)使(者)小(赴)り(追)を(結)り(又)改(り)言(る)中(く)元(来)金(烏)大(友)皇(子)の御(謀)殺(小)味(荷)檐(し)々(多)小(如)何(も)所(存)や(有)え(皇)子(の)御(使)下(り)佐(伯)連(男)と(以)り(出)陣(と)催(促)せ(小)約(成)變(り)虚(病)を(う)ま(て)催(促)小(應)せ(と)世(上)静(媪)小(及)び(後)時(く)小(九)列(の)緒(士)と(か)ら(必)深(れ)大(望)有(り)る(筋)我(も)巧(言)令(色)と(以)り(金)烏(小)阿(り)建(ひ)十(分)渠(が)心(と)湯(一)本(有)秘(と)勤(め)女(色)小(耽)らせ(或)八(貢)税(と)重(く)唐(を)て(下)民(の)恨(を)背(く)や(小)斗(り)も

終(小)滅(亡)させ(ん)為(な)り(知)り(如)く(金)烏(小)我(母)と(妹)と(怨)敵(た)れ(疾)小(毒)害(も)ろ(穴)腹(首)と(搔)ゆ(れ)も(且)足(下)と(契)約(せ)し(言)の(信)と(守)り(今)以(り)手(と)下(さ)む(と)金(道)九(殿)の(世)出(身)を(待)り(早)魁(小)雨(を)望(ま)り(望)守(と)馬(來)田(公)横(死)有(り)已(ふ)十(年)と(歴)れ(金)道(九)殿(も)十(二)才(小)かり(身)ふ(ら)ぬ(抱)む(今)三(四)年(の)春(秋)を(送)む(復)讐(の)針(策)と(廻)さ(る)筋(其)時(ハ)我(内)應(して)金(道)九(殿)小(力)と(添)俱(小)天(と)戴(ぬ)仇(を)某(も)報(り)か(ん)古(の)左(乳)明(を)怨(成)隱(して)其(人)と(交)る(事)と(愧)し(と)聞(ら)む(現)在(の)仇(敵)を(金)烏(小)膝(を)屈(して)心(を)わ(ぬ)追(從)暹(薄)と(某)が(心)外(に)推(量)の(人)と(言)れ(田)守(三)拜(して)謝(し)我(小)脚(辺)の(如)我(義)者(ハ)當(世)小(希)なり(黄)金(五)文(を)交(深)う(ぬ)人(心)疇(昔)の(約)後(今)烏(變)朝(の)鐵(定)ハ(夕)小(違)ハ(世)の(あ)い(ひ)わ(く)只(酒)食(と)俱(小)と(信)友(と)心(得)し(浮)薄(の)族(の)と(な)る(小)我(仇(と

金道九殿の御使下り

差置く他人の仇を報せり。然も其身も孝義に全うせんと怨敵小忍
去りて手と空して年月を送る。更義と云ん信と云ん実。小金道左殿の
為小八弓矢神も縋つ。我も足下の情も。毒死を命と全うせり。
更又再生の恩人。我を生者へ父母たり。我を達する者。小八御邊なり。義者
値遇も。伴者の所謂因縁。有るも。拜謝して。演ふ。推明。申さる所。心
申さる所。心。其小中。一度袂と云。早昔と云。十年。今日。邂逅
も。又奇と云。珍。再會。進。音物。有。刀掛。太
刀。把。田守。前。差出。田守。不審。是。八。縋。賜。小。御。芳。志。不
々。是。八。返。進。侍。と。推。戻。と。云。雅。明。抑。辞。先。中。心。を。見。あ。れ
と言ふ。田守。倍。不。審。太。刀。把。上。押。戴。鯉。口。三。寸。抜。け。燈。小。透
一。克。看。も。紛。も。た。先。年。雅。明。与。一。石。切。の。太。刀。な。り。を。大。公。敬。馬。此。

太刀の先年我死せ。燈據おせ。御邊小渡せ。我太刀なり。然も金鳥
小渡。御邊の所持。有。如何。と。問。時。雅。明。答。て。其。前。足。下。の。教。の
官印。と。其。太。刀。を。以。て。金。鳥。を。統。喻。し。小。原。愚。も。真。なり。と。我
罪。を。免。却。す。武。士。取。立。當。座。の。賞。物。と。其。太。刀。を。我。小。子。に。夫。より。と
誓。我。指。科。と。て。君。足。下。小。再。會。せ。を。返。進。せ。ん。と。思。ひ。寸。志。を。漸。く。今。夕。果
せ。ん。と。言。ふ。小。田。守。大。公。喜。び。太。刀。を。三。度。押。戴。死。穢。小。御。厚。志。何。の。世。小。八
忘。る。所。也。抑。此。太。刀。先。君。より。拜。領。し。て。須。臾。も。身。を。放。ま。さ。ず。百。濟。國。を。帶。し
往。高。名。を。顯。し。秘。藏。の。太。刀。を。命。代。小。御。邊。小。渡。せ。り。寢。覚。も。猶
身。を。惜。む。念。止。ま。じ。小。御。邊。の。深。情。を。再。以。我。手。小。返。る。更。大。慶。何。う。身。小。如
人。万。分。一。報。恩。の。為。我。も。呈。さ。る。品。有。と。て。傍。に。某。苞。より。一。振。の。太。刀。を。把
出。此。太。刀。八。柄。鞘。古。び。れ。當。今。い。ま。芳。野。小。在。せ。時。某。十。市。皇。女。の。忍

使小参一節君より賜り、太刀予の壬辰の乱小戰場中、敵の甲冑を斬り
更敷をねど、少も刃欠を鑊蓋と斬、更敷を切ぐ。我石切もあさく、あね名
刀たる願く、指料となし、復仇の期小臨。此太刀予の本意を達し、
とて予を雅明歩悦、押頂丸実、忝に賜う。金道九殿、世小出、ひて俱
小金鳥と恨ん、時凜が手より貫緒し、太刀を討、八流石小快、予此太刀を
以て仇を復ん、と愉快たれ、と受納り、斯く後行末の計策と示合し、示談
終、雅明田守小向、夜明て後、去ゆ、んを從者ども、のる、同あ、い、夜の
明き、間、此、癩と越、去、又、跡、某、よ、系、計、い、ん、と、す、と、田守承、引、後、會
茲期、別を告、木免、若、わ、ろ、と、も、左、右、と、高、堀、と、兼、越、難、な、く、身、と、遁、と、落
行、多、雅、明、を、田、守、父、子、の、縛、繩、と、庭、の、樹、木、小、繫、糸、を、縛、と、引、切、と、逃、去、と、休、小
わ、し、ま、あ、ら、ん、体、小、枕、小、就、と、る、小、徑、な、く、雞、鳴、小、な、り、と、る、が、雅、明、起、出、て、從、者

ともと叫起し、朝餉畢て出立の用意させ、昨日捕し、兩人を曳、來れ、と、途、を、
承り、いと、三、四、人、奥、庭、へ、走、往、ん、小、繩、を、樹、木、小、繫、糸、有、と、も、兩、人、と、も、繩、を、引、切、て
逃、去、と、覺、く、陰、が、ふ、ん、え、れ、を、大、小、狭、れ、走、散、て、斯、と、告、る、雅、明、も、偽、り
強、た、面、色、し、我、前、夜、渠、們、を、弘、明、と、名、る、小、旅、疲、で、懶、く、思、ひ、明、日、早
天、小、弘、明、せ、ん、と、筆、兩、小、捨、置、し、我、油、断、り、你、們、が、過、ち、あ、を、と、よ、り、又、捉、へ、き
時、も、有、ら、も、と、て、馬、小、お、棄、旅、宿、と、立、出、都、で、指、て、と、上、り、と、る

龜山父子闘賊徒 五 芦城山寨邂逅旧友

宇津田守、雅明が旅宿と潜出、中園筋を徑、所々の神社佛圖、恭詣
と、る、毎、小、金、道、九、殿、の、所、在、を、知、せ、し、と、祈、念、し、人、を、尋、ね、所、小、て、を、若、白、垂、り、所
在、を、知、便、と、や、と、耳、と、聳、り、聞、と、り、も、更、小、夫、と、思、ふ、千、懸、心、も、な、く、中、園、を、過、て
西、園、ふ、ら、筑、前、園、芦、城、山、の、麓、を、通、る、処、小、お、志、ち、十、五、六、人、の、山、賊、前、後、より、頭

と出田守父子と取囲み路金を投出し衣服を脱ぎ通ふと雲と面を奪ひて
引剥んとするふと田守憤然と怒り近付賊を搦執で投散し其木免若も
小童あざり力強く劔法を学ばれ此も憶せむ賊の刀を奪ひて小腕あざり
斬るる群盗ども父子の勇氣小辟易し海を被り手を負ひ八方に逃散る
田守父子は追討せむ及むと捨て往処小又山嶺より十七人の賊群り出中も
魁首と見え大漢大刀を揮ひ田守小堅てりる田守先小賊の刀を奪取し持
とれ大漢と迎合し一往一来と戦ひあざり賊の面を熟かれ古朋輩支磨の末
高とる者かろふと田守声かけ体小高あざりと小賊首も手と止め田守が
面を能くを鬚鬚とも霜の色小変れあざり正し亀山太鳥たれあざり
足下小亀山殿たれと貴所小主君横死の砌狂死せれとゆふ尚存命
あること不測たれ先此方来り更とて田守父子と引し草賊們と俱小林中

へ伴い入古る古廟の有るへ亀山父子と清し座せり其身も次小坐し小賊ハ
席外小居せらる田守木高小向ひ我存命とるふ付て二條の長物結あり其ハ先
且く置你ハ何とと浅様れ山賊の群小入らると問小木高颯々額を撫
貴所小對して令と面ありと云ふ二で語中座し馬車田公横死ののち後
貴殿ハ狂死有と同鏡し白虫殿ハ都へ上ると書遣しと妻君と俱小行方
あれは王家の家督金鳥殿後見せらるれも政道僻吏多し推君ハ姪ハ
公羽攫ひ社國家ハ終小金鳥殿の有とて媚婢者ハ功たれ小加増と立具言
せらる者ハ罪めれ小縁と削り或ハ追放せられ無実の刑小行り者もあれ心あざり
輩ハ追く小國遠と我も今大伴家も頼母ガガと見限り朋輩伴連荒と
俱小白杵と立退諸國と漂浪とる内囊中已小浪人の産業たれ小野武
士とかりと切取とる間小追く徒黨集り其中小金鳥殿の長臣牛尾が家子入



有て一時談話の序小馬末田公の横死、実、金鳥殿の奸計なりと結了れ始
 て金鳥ハ亡君の仇事と知時節と待て古君の仇を復せん為倍後堂と如
 らひ集ち己小百五十人不及る當國丹城山の奥小塞を構へ小賊们を諸方
 小細細させ不義なる旅人の衣服路費を奪ひ或ハ富る所人農民の金錢米
 穀と掠取塞中積貯も軍戦の具なり連蒐ハ先頃より七十余人の小賊と
 将々九列路の浦と徘徊し海上の旅船を劫り取りたり斯非道の金米を
 集りも忠義の為かれを怒り其が身上ハ大略如是狂死と言觸りて却て存
 命ある貴所の来由ハ如何と問われ田守其様ハ如此くたりと金鳥が為小鴉毒
 を呑され事と始り垣雅明が義心の隻牛尾と討り狂死せりと雅明の言
 吹負う方小身とせ木免若を得る條今度幼主白虫が所在と尋んり西
 國へ下り追委り結了せられ木高は度毎小驚嘆り且龜山白虫が苦忠と

感、金道丸殿此世在りと安く斜めハ悦び借云々ハ貴殿推君
 の脚行衛を尋りてあるを我山寨小脚を留り我妻くの草賊中
 國及び九列二島まで徘徊しハ渠們小命と推君白虫殿の所在と探
 尋させいり不知更ゆり貴殿何國を心當ともなく尋廻りてハ忍
 迂遠々んと言々る小田守沈吟して須臾考へ心中所想道我此物堂の
 群小入り俱小氷平泉の水を飲んて渇りずとハ金道丸殿の所在を
 會統旨の旗上まるとも軍勢わくとハ金鳥と雌雄を争ひつゝハ木高が
 勸小頼ハ小賊们小除て白虫が所在と尋させ我ハ時々小離散あつる主
 家の浪人を招集り至家再真の準備せんと心遂小決し木高が勸小任す
 事なれと言れを木高も悦び田守又子と伴ハ小賊们小先と拂りて若城山
 の奥なる巢穴へと隠りたる是より田守ハ塞中ハ任し木高と相議りて草賊

們を諸國へ遣して金道丸白虫行衛と尋させ田守八自造の時の備ゆと
残る者ども小指揮して山實小石垣を積せ堀とせ實中小櫓之掛間と
儲け且實中小大なる拔道と堀通させ常平なる岩と以て回道の口と
蓋ひかぐぐる程小要害堅固の此名と成ふ多斯く其年暮明れを
白鳳二年の春とかり漢川の氷猶解ざれと雲間の梅綻ひ初折知良小啼
鶯の音矣山里の曆わりと其睦月の末つと伴連菟去年より海上小
て奪掠し貨物と數十駄の高荷小造り馬小負せと妻の草賊と俱小山
實へ咬りれを木高大小悦不得物の多分見て其勲を賞美し去年より
龜山太息父子が山實小逗留とる由と語れは連菟も大い小悦ひ奥の房へ
往く田守父子小對面し一別後の素情と述べ悦の酒宴を催し不益と噴逆
小廻し談結とくちなる序小田守金道丸白虫が所在今以て知る由を結

れを連菟はくくととや田守小向ひ脚結小付く心當りる更あり我
部下の者小去年の秋より新小かり。當國早良郡の者のしが渠あ時
某小語いふ早良郡生の松原近村村落小早良等と名呼浪人のいふ
幼重小手跡と指南し又若者小劍法柔術を教導之浪人の産業
とせり其者の子小希有の者のい未だ十二才なれも令利なる更限なく
手迹素績劍法短捷水煉ふは道達せどと又更なる世人奉く神
童と稱し我も彼浪士小志を柔術と習ひひい親しく彼小児を
見ひいとせせ浪士六中回辺の者も又西國の産とゆひく生國八定あり
ざりよ若彼浪士が白虫殿小てはやくやと語る小を田守膝と進み其を
甚ど耳よりたり其浪士の年齢人品はゆきと向小否其議ハ精く
いつと彼小賊と呼出しゆえ渠小精く向ふと早速其者と席末ハ

出する田守彼者向ひ候が時柔術の師と頼一浪士の年齢人表が如
何なる人かと問ふ小賊答てさん年齢五十七八才身材高く柔術
人なり怒る時甚だ猛くんえいとぞ言々田守坐す皆白虫人白虫粗
似たりと木高連蒐向ひ今渠グの一如くも其浪人が尋る処の白虫
て彼神童と稱する小児が金道九殿からん小量なり我明日思息と將
彼浪人の方へ往思息と入門させると名をて白虫余人の對面と試らん
と言々を兩人も出る處とて又酒宴を盛おし満座酔を催して盃盤を収
め其翌日田守ハ木免君と武家の児の体ふとけけり其身も立派小装
小賊を奴僕と。芦城山の塞とて立出早良等が方へを赴たる

龜山訪白虫草屋 并 兩雄謀復仇

且說早良等ハ金道凡已小十三才小ちるれ。今二兩年迄方む大度と結安

復仇の大義と企んと。門弟の中よく智愚剛臆と試し物の役ふ立居る者ハ
其とハわけて一味荷擔お勧多ふ白虫が德行と思義お感とて荷擔もる者
百四五十人おと及る。然る一日門前より下僕小案内とせせ小重と伴ひ入
来る武士あり等が門人出迎へ席お繕ど何の為御来駕いと問田守答て
某ハ近郷小住居もる者小い。愚思ふ平迹の御指南と願ん。推參仕
とて。教師ハ御在宅小いやと。小即ち在宿仕と。先御光臨の儀を達し。下
とて入る入る頃。立出先彼席へ御通下さるべと。田守又子と繕どく
座敷へ伴ひ入座小著し。田守少時待居るうち。等立出座。互
小面と見合とて俱小少狭等先刻を登し。思ふ。龜山殿貴所ハ七君
横死の砌我小子と托し。其後行方と不知。此十年来心頭小く。昼夜忘
る。間も勿。思き。や今日無吏の對面せん。と。約せ。言々。田守も別

後乃情を演、白糸木免若を渡せ、後垣の雅明と謀り合せ、狂死せし
言せし石上なる吹負が許し身を寄霊狐が木免若と救ひて將て来し以
未壬辰の役吹負不徒ひて出陣せし條今度却王の所在を尋んぬ吹負不
暇をとて和列を立言備の鞆お垣の雅明小再會せし支芦城山の林處にて
支麻手木高お逢せ芦城山の砦小脚之停、今春伴連鬼が物結小就尋来し
まぐ後泊もなれ終るれ等も金道丸に懐て臼杵城を立退て諸國を漂浪
當國小住居せし支金道丸が令利秀才の條寛平白虎の靈術お瘡病
平愈し祠小勸請せし遂に結ぶ俱小悦ぶ支限方く不無と出と酒を
酌し往支と結一度ハ悔と一度ハ悦びる等木免若が老成く生立し
必賀て曰此子息ハ推君と取替て女主小渡し置れば必定金鳥が為小害
せられぬ痛す思ひぬ靈狐の通力お危き一命と助くれを運強

推君の中只今對面させやをてれあまども今朝より當所の生社、
糸指あつていざ飯りのをど飯宅おぼ上り對面させ進まじ但彼
推君天性の俊才か一皮聞くと知奇童おてハ在せども支不逆りのよ
性なれ未だ馬未田公の横死の義と結明さど勿論金鳥が方へ洩せん
支と俾て某が実子なりと言かて言ひぬ其心得を以て對面あ
と唯某が見のぞく挨拶しと口止し金道丸が行条の二に結聞せられ
む田守も聞毎小驚馬嘆し如夏なれ成人の後金鳥と亡しものふまうと
末頼母しを思ひくろ斯て程なく満石壹岐の社より飯りたる等即ち
座席に伴ひ出田守と古の朋友かりと言せせ又子小名對面させまが
く世上の談結し後支不寄て両童と退りり儲田守小向ひ声を低て
言々るハ主家の懸敵も金鳥威勢倍強く九列二鳥の武士渠と制する

者なり。容易小渠と謀んせむ却毛を吹く疵を求むるは
とも先尅足下の十さうか如く小く彼垣の雅明と争ん敵方小有て味方
へ内通するどめを又謀るればあらず。されども金道九殿いまだ十三天
たれを更と発するふ早し今西三年と待て大事を明し會秘昔の旗上
せん其まが足下ハ芦城山ハ飯まき一人たりとも軍戦の役小立ぬる者と
招れ集りし脚子息ハ我預りおきて幼主と俱ふ武技軍学と教導すべ
と議しを田守も承伏し我も左を思へり稚君脚成長あるやと
我ハ芦城山あり木高連菟們と高儀と味方と招れ旗上乃準備と
さるるさあれと不定のせ乃中我も足下も俱ふ耳順小近死身なれど
万一何とが先ハ病死さるばれおあまを若我死しを足下復仇の大義
を針の足下没去あまを我幼君と補佐し義兵乃旗上と命

互小兩談とて示し合し田守ハ我子と呼ぶ此家小寄宿とをなれと命
ト満石及び等夫婦小辞して僕我將芦城山と飯りたる

助野執両重大懲醉狂衆士

早良等ハ宇津田守小面會と二臂の力と得たりと大ハ小狼小水免若
茂寄宿の弟子と言ふ満石と俱ふ文学武技を教導す小その
才智満石小才と紀臆より。年紀より大射力強く普通通の若者
の持ちぬる物ども木免若ハ概く取扱ひたるお等も流石龜山が子たり
と感して愈心とめてど教導する斯く月日小閑守なり白鳳も四年と
かり満石木免若両童とも十五才小及たれを等も今日や大更と明と
明日や主従の名告とをなれを思ふ猶若氣の血氣小送り更と過
人更と心と悟も明と時節と見合たる満石ハ木免若が更と

これ我昔古の友と得たりと。同胞乃て親睦を寢食と俱に我昔古と
勵合平目其鍛煉と競る小徑捷也物ハ満石木免若小勝リ力量
相攬少ハ木免若満石小勝リ々。俱小十五才の総角小他出さる小も
両童平目小相伴々出行々々或日満石木免若例のて々連々壹岐乃
社、猪々折々折生中旬々所々の櫻花繚漫と咲かれ散る初々わ
景色の見捨が々々を両童與小兼て其所此所と花を見廻り々々ある花の
本小寄寄か々々や小櫻木の面小暮市廻り花見の酒宴を催さると覺
く大勢の声々々颯ハ弘絶々々。然る小推夫と云る男兩人二頭乃狼の四足
と繩小括り竹小々々擔ひ事々々々満石渠と見々必定我家小勧
緒々寛平白狐の眷属か々々と思ひ助け々々々々狐を擔ぎ男と呼々々
其狐如何なる罪有てり其如く縛り何方へ持行やと問小彼者答て此畜

生さして罪か々々々も谷の木蔭小眠り居々我我捉得々市小踏面々々
擔行々々々々々満石曰然も我其狐を買なと。懐中より錠の銀と
出。是は小我小賣子助と望々々木免若、靈狐の爲小命と助られと
又の物語ハ々々々狐と尊々々深々々俱々々賣れ々々々々。男們銀
と々々々坂市小踏も今賣も何と理なり。さ々々此畜生と賣進さ々々
さ々銀と受批を渡さん。鼠下と拍々々忽ち其狐我買なと呼々々幕
の内より一人の血氣の武士八九分の酔と帯々頭と出浪滄と歩来り々二人
の男小向。我徒數劇の酒宴不行厨の肴々々々其批と二料理とと肴と
今一盞酌も又真なり。價ハ你们望む程得さと下。我小賣上とと理不々小
言々々々男も狐の繩と解んさ手と留め我ハ何方小も價多々方々
賣ハ得々々此銀より多々賜ハ貴客賣進を促さと。以前の金

三巻の二巻目

と満石小返さんとも満石色と改め是は筋力十条の價の多少は有
我先効かれ他の人へ責まると。銀と押戻し争ふ内木兔若八手早く
狐と括し繩を解かれ狐を嬉しげに飛ばす如くまて何方ともあらず逃矢
たり是と云く二人の者、因果て口用し言所をきくと武士勃然と
大に怒り憎た童が挙動を我買ぬれ狐を俵小放しると奇怪なれ此
上を狐の代不你が五臓と實の目小切さるるて者おせんと彼処へまれよと手と
引狐おと二人の男大に怖と採支も中と遠足出ると逃去る満石武
士向ひ約を卓と謝られも。武士倍憤り強引張行んと。木兔若見
よて武去り狐の手とカ小件と扱すめ扱放しられ武士愈悪奈你も日類
俱ふ我刀を屠殺をいと。又木兔若が手と引狐と振ふて却て其手と
把より早く大の男と三間針投々るふと。土辺おまると腰骨と打ち頃お起

り得上を面と醜く臭れたる此物音小暮の内より十三人の音侍破羅
と近出老成過る童が腕まると二人も脚腰踏折ると再九日小群り
くると両重く更ともせど。近付者と柔術にて痛め組でうると投り
飛鳥の如く働かれを武士们案お相違いか。猶肩に魂小追取め二人の武士
木兔若が背より腕と抱付ると。又二人の武士左右り手と捉て捻仕人し手
木兔若從容とて申と言さる左右の手とち合とふと武士腕小曳れて所
小寄頭と頭と強くお合。噫乎と叫び手と放して己が頭と撫る間も有
せども木兔若左右の脚と揚て喘と蹴返す背手と廻して首筋強し狐
くれは具不瘡く組付し手と放し多ふと。木兔若振返く其者の帯に狐
目より高く投上ぐる大地倒と落ると利腕突折平這る。此内満石
或ハ拳術小のりし早足小蹴倒し千変万化の秘術と尽して怪しむふを



此の買へ
た金丸
木免若元
頼の士と
たぐ

十三人の内七人を手を折れ脚を損ぐと逃散残り六人と技連斬ぐ
うらまらるる西童八公をこきと此も此も草花の穂の風小乱る如く白又
と躍起這潜る煙捷さき双蝶の連架の下を潜る。前小有るとんれ
忽焉とて後小出更小眼小見小むる隻触す武士們は却て口封とて疵
を被り果ハ刀をち落され赤手と揮り逃るも有口封の疵小瘡と朱小
成て退も有く漸小對人か。目己小黄昏小及られ西童も今ハ是迄
と。衣服削ひ徐く家路と皈りくる。先刺より往來の諸人亦小回と備
心く見物して手小汗を握るる。皆西童が力量煙捷と感賞し武士們
乃逃るる指し笑ひとる。小評論とて己が隨意行去る。彼青侍們を
當國二郡の領主般無橋千足が藩中の士かりとる。由かれ更と好て幸れ目
小逢明白小介紹りも得中とて忍く小医療と加へ何卒此怨と暗とるやと

赤寄と密く小高儀とれも能く彼西童の身上と探り更まむる。生乃
松原近れ所小住早良等とる。劍法弓馬の教師の子と弟子小て彼早良
を武術軍法小長。般無橋が藩中の士も早良小弓馬擊劍と學ぶ者數人
有其他彼が一人二百人小向りとの義かれを有活小仇と復さん更も叶す。唯
其怨と暗とるれ時節と執念深くと待ふ々々

白虫語幼主未歴并金道丸潜祖金鳥

隠るより頭なるハあとの影のく。満石木兔君ハ家小飯ても。路次の喧
嘩乃更小口止とて口外せざる小維のた。喧嘩の風流高くなりて
等が耳小入れを。等大小狭れ是我が余小大更を包。過推君更の
復仇の義と告ぐる。斯脚身の危れ更とたのまあり。今ハ巨細を悟明く
其短慮と誠とる有る。満石一人を雨室小招れ上座小坐せしめ

其身そのみハ香未かうみ座ざ不ふ著しやく言ごん改かひりく由ゆ々々今いま日ひまま八はち脚きゃく身しん之の某たがひがこ児ゝといふひ
倭やまと小こ満まん石いしとい呼よばいひひ深ふか死し慮りょリ有更さら小こて。脚きゃく身しんの実の父君きみといふひ無な事じ後のち
國くに白しろ杵きねの城主しゆ大だい伴ばん馬ま末すえ田でん公こうといふひ百ひやく濟せい國こくの合戰せん小せう脚きゃく勝しやう利り有あり。飯いひ朝あさの
後のち九く列りやくの探題たん職しやく小せう任にんずるひ。諸しよ人にんの崇敬そう脚きゃく家け門もんの繁昌はん類るいなく脚きゃく身しん
脚きゃく誕たん生せいあり。名なを金道どう九く君きみとい号ごうす。脚きゃく寵ちゆう愛あい浅せんく。是こゝに小君きみ二に乃の脚きゃく時とき
父ちち君きみ馬ま末すえ田でん公こう脚きゃく舍せ弟てい金きん鳥う殿どのの毒針しゆ小せう箭せんて横死しか。其その砌せき先せん達たつ
て參り。木つぎ兔う若わ君きみ又また宇う津つ田でん守しゆ実まこと名な脚きゃく家けの長臣ちん龜かめ山さん太た息いきといふひヤやサさが
推おし君きみとい城じやう内ない小せう置ち進しんせ。終つひ小せう金きん鳥う小せう亡むすれ。といふひ遠とほ死し慮りょといふひ
木つぎ兔う若わ君きみといふひ年とし々々二に才さいちちり。夜よ中ちゆう某たがひ宅たく末すえリ。此こゝ兒こゝ
を推君きみとい取と替か足あし下した推おし君きみとい懷いだて。何なん國こくか。退しりぞ養やしやう育いく進しんせ。人ひととい成なり
の父君きみの仇金きん鳥う殿どのを討せ。再また大だい伴ばんの家名なとい嗣ついで進しんせ。といふひ

